



## 「がんばってはいけません」

久松 英二

「至光社」というカトリック系の絵本会社がある。絵本作家として国際的な評価を得ている故いわさきちひろは、この会社の創設者であり現社長であるT氏のなくてはならない右腕でもあった。同社はふつうの絵本の他に幼稚園児を対象とする月刊絵本「こどものせかい」を昭和24年から発行し続けている。現在毎号3万部発行されているが、店頭販売はしておらず、契約を結んでいる幼稚園や保育園あるいは個人へ直接発送される。1994年の秋、その社長のT氏が唐突にもお願いしたいことがあるということで、わざわざ東京から会いに来られたのである。そのお願いは少なからず私を驚かせた。

例の月刊絵本には、保母や先生、親を対象にした小冊子「にじのひろば」が添付されている。美しい口絵やかわいいイラストがほどこされたしゃれたエッセー集だ。文学、芸術、福祉、社会活動その他いろいろな分野で活躍している方々の短いエッセーが満載されているが、T氏のお願いというのは、その巻頭言にあたるエッセーを三年間受け持ってほしいというのである。「えっ、エホンの会社？この僕が？エッセー？ナニそれ？」狐につままれた思いだった。

私は12年前に司祭になったが、その年のカトリック名古屋教区報に編集部から新司祭としての抱負を書いてくれと頼まれた。生来臍曲がりな私は「不純な動機で神学校に入った私」という挑発的なタイトルで駄文を寄稿した。その記事がどういふわけかT氏の目にとまり、相当気に入ったらしく、これが執筆依頼の理由となったとのこと。なんとまあいいかげんなこと。それにこんな無名の私に頼むなんて、この会社かなりマイナーだな。

ちょっと横柄な気持ちになった私は、ちなみに他にどんな人が書いているのか、サンプルを見せてもらった。宮城まり子、星野富弘、今井美沙子、秋山ちえ子…。背筋が凍った。「いくら何でもこの無名の私が？ご冗談でしょ」と言おうとしたら、すかさず「無名でもいいのです。あなたに決めたのです。さっそく来年の四月号からよろしく」とT氏。考える暇さえ与えなかった。

こうして、私は1995年の四月号から1998年の三月号まで三年間、量にして1300字程度のエッセーを毎月書くハメになったのだ。わけが分からぬうちにそういう話になり、自信ありませんという気持ちをモロに見せつけながら「じゃあ、できるだけがんばってみます」と答えた。するとT氏は急に大きな声で言った。「決してがんばってはいけません。ガンバルとは我を張ることです。がんばって書いた文章はいくら上手でもつまらないものです」。私は一瞬言葉を失った。「じゃあ、どうすれば…」とつぶやいた私に彼は穏やかな笑みを浮かべて言った。「降ってくるのを待つのです。きらっと光るまでポカーンと待っていればいいのです。」生活の各瞬間の呼びかけに虚心に耳を傾けていると、必ずきらっと心の隅に光るものが生じる。それを書いてくれということだった。

書き始めて二年半がすぎた。最初の一年は、テレビでお馴染みの三屋裕子さんも別の欄にエッセーを連載。お互い出来ばえを競いあう。私は残りあと半年分で終わりだ。がんばらずに、頭を空にして何か「降ってくる」のを謙虚に待つ。「我を張る」のが好きな私にはいい訓練になっている。しかも、この訓練の成果、どれだけ「がんばらなかったか」を少なくとも3万人の読者が毎月審査してくれているのである。T氏に感謝したい。

(Eiji HISAMATSU : 文学部助教授)

## 聖書和訳の歴史

伊藤 敦子

前号まではプロテスタント訳が中心であったが、今回は初めてのカトリック訳から最新の共同訳までの歩みを順を追って紹介していきたい。

## 【明治期カトリック訳聖書】

<聖書に至るまで>

日本のカトリック教徒は弾圧に苦しみ多くの殉教者を輩出しながらも、地下に潜伏し信仰を守り続けた。彼等への再布教はキリシタン禁制が解けた1844(天保15)年のフォルカードの琉球渡来に始まる。しかし、日本カトリック教会における最初の聖書の出現はその再布教以来、実に36年を待たねばならない。というもカトリック宣教師達の主力は、浦上を中心とする潜伏キリシタンの末裔数万人の帰正に注がれ、彼等に正しい教理・典礼・祈祷文を教えるための教理書・祈祷書の改編を先決とせざるを得なかったからである。その最初の教書が1868(慶応4)年刊行の『聖教初学要理』(プティジャン准)である。こうしたカテキズムとともに『聖教日課』と題する祈祷書が1868年以来編集されている。

聖書に関連した出版物としては、1873(明治6)年刊行の『後婆通志與』(プティジャン准)、1879~1880(明治12~13)年刊行の『旧新両訳聖書伝』(小嶋準治訳)が挙げられるが、前者は4福音書から御受難の事蹟を選び集め日時順に編んだものであり、後者は児童用の通俗的聖書物語である。その他に1880(明治13)年刊行の『耶蘇言行紀略』があるが、漢訳の転訳であり解説的語句で福音書を結び合わせた総合福音書であった。

<高橋五郎訳『聖福音書』>

日本カトリック教会初の和訳聖書は、『聖福音書 上』(1895(明治28)年刊)と『聖福音書 下』(1897(明治30)年刊)で、ヘボン訳からは24年、翻訳社中訳の完成からは17年遅れている。この聖書はスタイシェンの口述に基づき、ヴルガタ・ラテン聖書を底本とし高橋五郎が訳したものであり、各福音書毎に小引(解説)・目録が付され引照付。さらに各章毎に章末に註釈があり、主な語句の説明がある。引照・解説が付くのはカトリック訳聖書の特徴であり、後のラゲ訳にも踏襲される。しかし、高橋五郎がブラウン・ヘボンの協力者であるだけでなく、その当時立教学校の教授であり一致教会に属していたことを考え合わせると、『聖福音書』はプロテスタント訳の影響を強く受けたものと言わざるをえない。

<ラゲ訳『新訳聖書』>

『聖福音書』の後も日本カトリック教会には聖書全訳の業がなく、見るべき聖書的著述も数編あるにすぎなかった。しかし、ベルギー人司祭ラゲが鹿児島県山下町教会に在任中、ヴルガタ・ラテン聖書を基にギリシャ語聖書を参照、伝道士加古義一の助けを受け新訳聖書の完訳を試み、1905(明治38)年頃脱稿した。それを当時の第七高等学校講師小野藤太、武笠三、二松学舎の山田準等が添削しようやく成稿を見たが資金がなく、直ちに出版できなかった。1908(明治41)年、ラゲは東京の築地教会に転任するが、1910(明治43)年私財と有志の寄付金により『我主イエスキリストの新訳聖書』はようやく刊行の運びとなった。それは直ちに異版が出たが、通常これを初版としている。これは私訳と呼ぶべきものであるが、日本カトリック教会における確実な、新訳全訳の嚆矢であり、ほとんど標準訳のように長く用いられた。

日本人協力者の手がどれほど加えられ、原稿が訂補されたものかは明確ではないが、その訳文は外国人ばなれした名訳であり、日本語としての完成度も高かった。また、その聖書学的引照・解説もすぐれたものであるとの高い評価を受けている。カトリックの最初の口語訳であるバルバロの『新訳聖書』は、このラゲ訳を改訳したものである。

## 【新約聖書の大正改訳と個人訳】

<大正改訳>

旧新両訳聖書は完訳された当時は名訳として明治の知識人に多大な影響を与えたが、明治2・30年代における国語の変化、思想界の発達、そして何より内外教会における聖書神学・釈義学の発達により改訳の必要性を主張する機運が高まってきた。1906(明治39)年、福音同盟会は聖書の改訳・出版を正式に決議。それを受けて聖書翻訳常置委員会は三聖書会社とともに三者協力の下に改訳を進める方針を打ち立てた。しかし、当の福音同盟会が中途解消したために、聖書翻訳常置委員会が中心となって改訳委員を選定、1910(明治43)年グリーンを委員長に選出し改訳事業を開始した。ネストレの校訂ギリシア語本文を用い、改正英訳聖書を参考とし先ずマルコ福音書から着手。その初稿は1911(明治44)年に完成、『マコ伝福音書』として刊行された。1917(大正6)年全ての訳業が完成し、大正改訳の出版を見るに至った。この訳は原文に忠実であり、文学的表現にも優れ完成度の高いものであった。

## &lt; 個人訳 &gt;

上述のように合同の委員会による文語訳聖書が刊行され広く用いられるとともに内村鑑三等による聖書研究も盛んとなり、個人による聖書翻訳事業も地道に行われていた。文学者がキリスト者として著したものとして、中村春雨の『バイブル物語』(1903年)、宮崎(湖処子)八百吉の『新約聖書羅馬書』(1907年)が挙げられる。また、永井直治は独力で聖書の研究と翻訳を行い、1928(昭和3)年『新契約聖書』として出版。1929(昭和4)年上沢謙二は『子供聖書』を刊行し、聖書知識の普及に寄与した。

左近義弼は『マタイの伝へし福音書』(1907年)刊行後、終生の業としてギリシア語原典からの新訳を志し『詩篇』(1909年)、『創世紀』(1911年)などを公にした。次いで湯浅(吉郎)半月が『雅歌』(1923年)、『箴言』(1936年)等を公刊、ヘブライ語からの個人訳としては画期的なものであった。その他特筆すべきは無教会の学者によるもので、関根正雄の『創世紀』(1956年刊)、塚本虎二の『福音書』(1963年刊)、『律法』(1993年刊)、『預言書』(1994年刊)等が挙げられる。

## 【口語訳】

第二次大戦後、新仮名づかい・当用漢字の制定などの国語改革の進展とともに、口語訳を要望する声が一段と高まってきた。こうした情勢に逸速く応じたのが、サレジオ会のバルバロで、1950(昭和25)年以来4福音書分冊を刊行し、『新約聖書』(1953年刊)、次いで1964(昭和39)年には『旧新約聖書』を完成、さらにその改訂版『聖書』(1980年刊)を出版している。これは、カトリックとして最初の旧約の完訳にも当たる。なお、1956(昭和31)年東京にフランススコ会聖書研究所が開設され、『創世紀』(1958年刊)を始めとし口語訳旧新約分冊を刊行、『新約聖書』(1979年)を完成させた。

一方プロテスタントも『口語訳新約聖書』(1952年刊)を始めとして、日本聖書協会も文語訳から口語訳翻訳への方針に切り換え、1955(昭和30)年、旧新約を合わせた『聖書』を完成させている。なお、最新の翻訳として荒井献・佐藤研責任編集の『新約聖書』が分冊刊行中である。

## 【共同訳】

第二次世界大戦後、聖書学が発展を遂げる一方で、第二ヴァチカン公会議(1962-1965年)で打ち出されたプロテスタントとの教義を越えた一致協力(エキュメニズム)の路線に従い、世界的に共同訳の機運が高まってきた。1966(昭和41)年にはカトリックのキリスト教一致推進事務局とプロテスタントの聖書協会世界連盟は、共同訳の可能性について討議を重ね、各国で共同訳を作成する際の「共同訳指針」を公表した。これを受けて日本でも、1970(昭和45)年にそれぞれの代表者から成る共同訳聖書実行委員会が組織された。1972(昭和47)年に訳業を始め、1978(昭和53)年に『新約聖書』が出版された。その翻訳はE. ナイダの動的等価理論に従い平易な日本語を期したが、多数の翻訳者によって為された訳文は固有名詞の表記にも統一を欠き、多くの批判が寄せられた。そこで委員会は翻訳の原則を変更し新約を改良、完成した旧約とともに1987(昭和62)年『聖書 旧約聖書続編つき 新共同訳』として出版した。この聖書が完成した機会に、カトリックも「イエス」の呼び名を典礼の中でも用いるようになり、両教会の信徒が同じ聖書を用いて共に祈ることができるようになった。またプロテスタントの旧約正典と明確に区別しながらもカトリックの第二正典と聖公会が公的礼拝で用いる三書が旧約続編として入っているのも日本では画期的なことである。

以上駆足で和訳聖書の歴史を追いかけてきたが、逸速く日本での宣教を始めたカトリックが先駆者であるがために弾圧・迫害され聖書和訳に容易に手を染めえなかったことは、歴史の皮肉としか思えない。それ故、遅れ馳せながらの聖書翻訳には累々と横たわる殉教者達の姿が透けてみえるようである。  
(Atsuko ITO: 図書館事務課)

## 参考文献

- 海老澤有道著「日本の聖書」(日本基督教団出版局)
- 泉田昭著「日本における聖書とその翻訳」(日本聖書刊行会)
- 日本「キリスト教」総覧(新人物往来社)
- 「日本キリスト教歴史大事典」(教文館)

## 資料紹介 クラセ「日本教会史」初版

CRASSET, Jean. Histoire de l'église du Japon. Par Mr l'Abbé de T. A Paris, chez Estienne Michallet, 1689. 1st ed.

著者であるジャン・クラセ (1618.1.3-92.1.4) はフランスのイエズス会司祭。ディエブに生まれ、1638年8月イエズス会に入会。69年以来、パリ修練院の哲学および人文学教授として、また、説教者としても活躍。フランソワ・ソリエに依拠しつつ、ソリエの著した「日本教会史」を、在日宣教師の書翰や報告、また日本布教史、殉教史などに基づいて改めて史実の洗い出しに取り組んだものが本書であり、稀覯の初版本である。

この資料は、1715年に第二版が刊行されたほか、諸国語に訳され、日本殉教教会の名を高らしめ、日本でも1878年太政官により「日本西教史」と題して翻訳、出版された。本書は日本におけるキリスト教史の最初の翻訳であり、しばらくキリシタン史研究の唯一の原典となったが、後に多くの誤謬が指摘され、またほかに多くの原典が紹介されるにおよび今日ではあまり用いられなくなった。とはいえ、従来秘められていた歴史の紹介と解明に役立った功績は大きい。この初版は八葉の銅版挿画ならびに、江戸や肥前の市街遠景や風俗、また磔刑に用いられた十字架などの図像を描いた挿図を含む点でほかの諸版とは際立っており、極めて興味深い資料となっている。

### <カトリック文庫新委員紹介>

**委員長: 山辺美津香 (閲覧・参考係) Mitsuka YAMABE:** 思いがけず与えられたこの機会。勉強嫌いと思居直らず謙虚に学びたいと思います。

**委員: 西尾 祥子 (シテム係) Syoko NISHIO:** キリスト教大学で学びそこで勤務しながらキリスト教についてあまりにも無知な私でした。今回このプロジェクトの一員になったのもキリスト教についてもう一度学ぶ良いチャンスと思い前向きに取り組んでいきたいと思っています。

**寄贈 布教用要理解説図版 (聖母カテキスタ会 木村咲子殿より寄贈)**

「南山図書館に宝物が入りました！」

北京輔仁大学で描かれたカラーの複製画コレクション (ポスターサイズ) が35枚、カトリック文庫に贈られました。北京輔仁大学は、ベネディクト会 (the Catholic Benedictine Order) により設立され、その管理は、後に神言会 (the Divine Word Missionaries) に移されました。そこでは、美術学科の学生達が聖書を主題に中国スタイルで作品を描いています。大学は1950年に政治的に閉鎖され、多くの作品が失われたり、破損してしまいましたが、国外で個人蔵となっている作品もあります。全部で何作品あったのか正式な作品数は判っていませんが、残された作品は製作者、またはその弟子達によって修復が行われています。単なる美術品としての価値を越え、それらの作品は更に二つの機能を持っています。中国美術を中国人でない人々に伝えるということ。そして、中国人にキリスト教について伝えるということです。実は製作者の多くはキリスト教徒ではなかったという事実があるのですが。

我々の複製画コレクションは、完全ではありませんが (恐らく、全作品数の一割程度でしょう)、私が知る最も充実したコレクションの一つであり、また南山が誇れるものの一つでもあります。これについての詳細は図書館で、F. Bornemann 著『Ars Sacra Pekinensis (1950)』を御参照下さい。(Walter DUNPHY, SVD.)

### <カトリック関係資料 寄贈のお願い>

本学図書館では、わが国におけるカトリックの歴史・文化・活動を知るために、関係資料の散逸、毀損を防ぎかつ広く研究者などへの利用を図ることを目的とし、「カトリック文庫」を1993年より設置し、下記の資料を収集しております。

- \* 教会刊行物 (教会史誌・教会報 その他)
- \* 明治、大正、昭和初期のキリスト教関係出版物  
(聖書・祈祷書・聖歌集・要理書 およびそれらの解説書 雑誌・新聞・布教資料・その他)
- \* 修道会史・教会史 および関係刊行物・資料 \* 日本への布教に関する外国側資料
- \* その他

つきましては皆様方から資料の寄贈を賜りたく、ここにお願ひ申し上げます。

なお、資料は選書の上、本学図書館の蔵書として所蔵させていただくこととなりますのでご了承ください。

問合せ先: 南山大学図書館「カトリック文庫」プロジェクト 〒466 名古屋市昭和区山里町18

TEL: 052-832-3163 FAX: 052-833-6986 担当者: 山辺

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス第8号 1997.7.1発行 南山大学図書館「カトリック文庫」プロジェクト 編集委員: 三浦基, 尾形裕司